

シナプス

第220号

明るく 優しく たくましく



学校法人 大東中央学園

大東中央
幼稚園

大東中央幼稚園園長室だより
平成27年2月17日発行

☆園長コラム ☆キンダーカウンセラーコラム
☆担任の保育日誌から ☆身体測定・万歩計計測・出席率

教育＝子育て＝脳育て……

“国家百年の計は教育にあり”とは言うものの、子どもに教育するのは、何と云ってもその子の親が主体・家庭が主体となります。

平成24年に国の施策として、乳幼児保育・教育制度の改善等が盛り込まれた「子ども・子育て関連3法」が制定され「子どもの最善の利益」が実現される社会を目指すこととされ、その推進体制に謳われる“家庭”の項目欄では“子育ての基本は家庭であり、家庭は基本的な生活習慣、社会的な礼儀作法、善悪の判断、他人に対する思いやりを教える重要な役割があります。また、子どもにとって最も安らげる場でもあります。しっかりとした家庭教育の実践と、父親も積極的に家事・育児に参加し、家族が協力し合い親子の触れ合いや家族の絆を深めていくことが期待されます。”と示されていますが、ここで言う“子育て”とは“我が子が、立派に社会で活躍する大人を育て上げる為の教育”のことであり、人の体力・知力・判断力その他の諸能力及び人格全てを支配するのは“脳”であることから“子育て(教育)”をもっと具体的に言い表せば“子どもの脳育て”だと言えます。

文教大学教育学部成田奈緒子教授が、公益財団法人・母子健康協会発行の機関紙“ふたばNo.78”で医学・脳科学からみた「正しい脳の育て方」として、次のように述べておられます。『脳育てには、守られるべき順番とバランスがあり、最初にきちんと育てられるべき脳は、寝ること、起きること、食べることと体をうまく動かすことを司る「からだの脳」(主に大脳辺縁系、視床、視床下部、

中脳、橋、延髄等をさす)です。生まれた時は寝たきりで、夜も昼も見境なく泣き、ミルクをねだる、つまり睡眠も食欲も身体の動きもコントロール出来ない赤ん坊が、次第に首が据わり、おすわりをしてはいはいが出来るようになり、一歳頃になると、朝目覚め、夜眠り、そして起きている間に姿勢を維持して体を動かし、食事を3回摂るようになります。同時に、喜怒哀楽を表情や声で表現出来るようになってきます。これが「からだの脳」の育ち、すなわち第一番目に起こる脳と体の発達です。だいたい生後5年くらいをかけて育っていきます。

次に一歳頃からは、いわゆる「お利口さんの脳」(主に大脳新皮質を指す)の育ちが始まります。この脳では言語や微細運動、そして思考などを司ります。人間ならではの機能が沢山詰まった部分なので、私たちは、どうしても脳というこの脳をイメージしがちです。実際、この脳は特に小中学校での学習を中心として、だいたい18歳くらい迄の時間をかけて育ちます。進化が進んだ動物ほど大きく機能も高度化していて、人間を他の動物と区別するには大切な脳です。大事なことは、先ずは「からだの脳」から育つ、つまり発達の順番が決まっていることです。二階建ての家を建てることをイメージしてみてください。順番を無視する脳育ては、例えて言うなら、二階建ての家を建てるのに二階から先に造っていくようなもので、結果としてバランスが悪く長持ちしない脳が育ちます。このような順番を崩した脳育てがしばしば ⇒次ページへ続く

「**こころの脳**」の問題を引き起こします。

人間の脳では、だいたい10歳を過ぎた頃から「**からだの脳**」と「**お利口さんの脳**」をつなぐことで「**こころの脳**」が育ちます。(二階建ての家で言えば階段です。)**「からだの脳」**で起こった喜怒哀楽の情動は、そのまま行動に反映されると人間社会ではうまくいかないことも起こります。そこで人間は、起こった情動を「**からだの脳**」から「**お利口さんの脳**」の一部分である前頭葉につないで、状況判断や記憶を使って論理的に思考をした上

で、自分がとるべき最良の行動や言動を選ぶのです。大人になり社会に出るためには必須の脳機能と言えます。「**こころの脳**」は「**からだの脳**」「**お利口さんの脳**」と順番につくられた後に、やっと出来上がるのです。立派に社会で活躍する大人に育て上げるためには、乳幼児期からの脳育ての順番を守ることが重要であり、その中でも特に大切なのは、何と言っても土台である「**からだの脳**」育てである、ということがわかります。』

辻本 博人